現代和歌選集叢書

第一篇

黑曜集

前田夕暮名歌選集

植竹書院發行

黑曜集

夕暮

黒瞿集

第四卷

夏
[illegible]
[illegible]

Ex. Libris
Bin
Sadao

黒曜寮

前田夕暮

現代和歌選集叢書
第一編
植竹書院發行

向日葵は星の海をみし
あひてゆらくことをかし
はつさきさびさび
幻日子

向ひ蓋は星の海をみん
あひてゆらりとなかし
はつさきさ
初田夕葉

此一書を亡き母と弟の
靈にささぐ

序

自分は今度四十年以後の作中より、約千首を選んで選集「黒曜集」を出版するに當つて思ふところが多い。就中最も今の自分をして過去の自分にまで牽きつけた力の強かつたのは明治四十年から四十一二年頃の作に於てであつた。即ち「收穫」のなかに收めてある諸作であつた。それらの作のなかには若い自分がやるせない戀に生

き、現實にめざめ來つた悲痛に生きて居た。痛手に苦しむ魚が水中に跳つて居るやうな心持を今の自分に痛ましくも力强く反射してくる。

あの頃は芽ばえであつた。その芽ばえは白く日に向つておのづから軟い光を放つて居た。そして延びやうとする欲求にあほられて死に身であつた。全身で打突つて行つた。であるから、その頃の作は皆生々しい主觀の悶きを認めることが出來

る。何だかこの生々しい主觀によつて貫かれて居るその頃の作は寧ろ今の自分にとつては幼くはあるが尊い若さがする。再びとりかへすことの出來ぬ若さがある。これが今の自分には惜しくつてならぬやうな心持もせられるのである。自分は「生くる日に」の序文のなかに『憶ふに「收穫」は自分をして歌壇の水平にまで引きあげてくれた忘れ得られぬ歌集ではあるが、渠は若き日の短かき夢の悲しきおもひでとして

幾かに心の隅にほの光るのみ』と言つては居たが、今此集を撰ぶに當つて、その頃の作を再び何年ぶりかで讀みかへした自分は、何のわけとは知らずに心が躍つた。そして茲にもこのやうな自分があつた、ここにもこのやうな生活があつたと打ち驚かれるのであつた。そして新しくその頃の自分が今の自分のなかに甦つてくるのを強く感じた。

次に四十三年頃から四十五年頃までの

作を讀んでみて、自分はすつかりしよげた。此三年間は何だが自分には空おそろしいやうに物疎く感ぜられる。それがため自分はこの三年間の作を極めて少く撰抜した。そして少し訂正なども加へた。

次に第四、五篇に收めたものは昨大正三年九月に出版した「生くる日に」のなかから選抜した。即ち大正二三年兩年間の作で今の自分に最も近いものであらねばならぬ。

兎に角自分の藝術的生涯のそもそもの

芽ばえから約七年間の作中より自分の好もしき歌約千首を抜き出すことは可成りにいろ〳〵の困難を感じたが、又それだけに兎も角もこれが自分の過去の殆んど總てであるといふ悲しいやうな喜びをもおのづから感ぜられる。

雪降りつむ二月二十六日の午後

前田夕暮

黑曜集

第一卷

明治四十年
明治四十一年の作

川ひとすぢあかずながるるみてあればみて
あるほどに人戀ひまさる

われ悲しすべての人の性(さが)をもつうらわかき
日に君を戀ひして

○秋は來ぬ犯さぬ罪のむくいなるこの淋しさ
をいかにすべしや

香として山鳴空へ消え行きぬとりしままな
る君とわが手よ

もの思はぬ心のさまと物おもひつかれはて
にしさまと相似る

ある時のある人われに僞りをいとやすけに
も語りけるかな

雁わたる夜空あかるしここにして三國はい
づち秋の風吹く

夜の花ふるへて咲けり月光の低う垂れたる
二月の家に

人すてし後の思ひをいとせちに知らまほし
さや行く春の宵

○紅塵の中に一人の君住めり都の春の日の暮
れおそき

君は泣く悲しき故か泣くことのうれしきか
そも君いたく泣く

晝と夜のさかひに咲ける花遠くたづぬるや
君心つかれて

大風の森こそうかべ世のはてに人戀ふる眼
の空にむかふとき

春深し山には山の花咲きぬ人うらわかき母
とはなりて

君生れし日吾はや君を戀ふるべく母の乳吸
ひて相摸にありき

路百里ふたたび秋はめぐり來ぬ吾等二人に
鳴る鐘もなし

風凪ぎぬ遂にいふべきことといはで別れし如
き心地するかな

君たづねてわか魂まよふまたの世の眼にこ
そうつれ初秋の空

○來む世にもやさしかれとてふと君は死にき
かへらず秋まためぐる

君は死にき君に代りてこの吾を思ふ子あり
や日は秋となる

洲に光る蟲あり青き糸ひきぬ君と相見る高
草のなか

秋の花うすき光の上はしる夕となりぬ待つ
人となり

○耳鳴りも今宵はうれし君が歌いつしかくち
にのぼりけるかな

風、秋となりて心は水涸れし沼にかよへる路
をのみ思ふ

○秋草の小さき實とびて我が前におちしとを
どる君思ふ胸

月あかし山風ぎわたり秋草のにほひただよ
ひ君思はする

十九にて君は死にきと葉櫻のかげにたちよ
り皐月を思ふ

○胸はつとせまりぬ顔に手おくまに涙あやな
く涙をさそふ

さびしさに心ふるへてありし日は尊かりけ
り吾現實に倦む

○夜の祈禱をはりし後に二人みてさびしくゐ
みぬ秋雨ぞふる

わがあらぬ相摸に心遠くさし戀ふるや君は
秋の日の前

日の下に夢みる如き眼をあけて青き小ひさ
き蛇われをみる

○山みれば山海みれば海をのみおもふごとく
に君をのみ思ふ

○胸あかう血ぬりて君を追ふ夢の來たれあま
りに心足らふ日

君をみるわが眼昔にことならず悲しからず
や君は老いたり

かへりみてわが爲め世をばあやまちし少女(をとめ)
あらぬにさびしうなりぬ

世はめぐる別れし人はまたあひぬ面變りし
て昔を語る

君に行く悲しき一路吾踏みて今ここにあり
夜の鐘をきく

神よこのはしためは泣く憎しともはたあは
れともさばきしたまへ

馬の歌一首

馬といふ獸は悲し闇深き巷の路にうなだれ
てゐぬ

泣き泣きてつかれはてたる人に似る海は夕
日に風ぎぬしづかに

翼おさめくくみ聲して空をみる秋の小鳥を
君と、ながめぬ

雁啼くやまたも悔い泣く日となりぬ獸と人
の間にまよひて

泡立ちて海よ眞白に日の下に小ひさうなり
てわが夢に入れ

高き木に熟れし木の實をあふぎみて心足ら
ひに二人ありし日

死して猶われをみるべきそらだのめひとつ
をたのみ君や死にけむ

呪ふべくいつくしむべくなつかしき相摸は
われの故郷なりき

凋落の相摸よ山は火を噴かずうらわかき子
の母に日暮るる

いひしらぬあるものわれをもてあそぶ心地
おほゆる君にむかへば

塚おほき相撲は悲ししめりたる枯草の香に。
うす明りして

冬の海傾きて鳴る日の下に、暗憺としてゆふ
べにいたる

以上四十年秋以前の作

＊＊
＊

ああ相撲妻となる子のわが母と語るがみゆ
る秋の日の前

○いたましやわかき心のおとろへも知らで遠
くも君追ひてゆく

人妻となりける人のおとろへし瞳の色を思
ふ秋の日

○替られし君が名書きて筆なれぬなげきに暮
れし秋のひと日は

君が兒の泣きごゑふともきこえずや相摸は
わづか十八里なり

○君が血潮いとわかやかにうけし子をひと眼
みせずやあはれ人妻

○人妻よまた救はれぬ生涯に入ると歎くか兒
をいだきては

夜となりぬ遠鳴る波に弱き子の祈るがまた
も眼に見ゆるかな

ややに倦むややに涙はかはきくるややに心
は君をはなるる

啼きもせず飛ばむともせず空をのみあふぐ
鳥あり磯山の上

○われさびしさびしきゆゑを知るからにあさ
ましうなり君をおそれぬ

人戀ふる血潮はわかき男のみうけしや春の
夜をひとりぬる

残れるは苦き悔のみひとりしてまたかへり
行くさびしき一路

大鳥よ空わたる時何おもふ春の光を双の眼
にして

濁りたる海原みゆる、その上を一羽の鳥の行
くが悲しき

大鳥の瞳しづかにとづるさま思ひいつしか
我れも眠りぬ

顔あまた暗きかたへにわれをみる死なる一
語をふと思ふとき

うら悲し老いたる野馬の双眼に衰へみゆる
木枯の日よ

われ眠りぬ暗きかたへに木枯のつかれし聲
を遠くききては

君が名よ我より前に呼びなれし子ありやと
思ひ涙はしりぬ

われのごと小さき愁にとらはれてあるかや
箱の秋の木の實よ

一老樹日にむかひ立つしづけさの白晝を思
へ君よわが手に

人走る逃れしものを追ふごとく木枯の夜の
冷たき街を

あはれ日は歎きに蝕けぬ涙して青き果食ら
ふ人のさまみゆ

明日も亦人戀ふる日にわれさめむ山に花咲
く水無月の日を

大空は風濁りなし果てもなく浩蕩として歎
きに暮れぬ

＊
＊＊

忘るるもいささか惜しきことのなき悲しき
人を捨てもかねたる

わがものとなるときとみに物足らぬ人をあ
はれみこの日にいたる

花あかるう日にむかひ咲くさまおもひわが
眼とぢたり皐月に入る夜

醜きを忘れて人を戀ひしうる喜ばしさに似
る悲しさよ

相摸より一縷の光われにさすここちし君を
都におもふ

よろこびをおさへて君にむかふ日の物かけ
もなき春の夜の家

何となき心の老いをおぼゆる日忘れてあり
し子を思ひいづ

わが性に早くもうつる人をみて捨つる心の
ふときざしける

いひしれぬ醜きうちに美くしきひとつをみ
いで君を戀ふる日

夜は深し愕然としてわれとわがかくしてあ
るにおどろきさめぬ

○ああ君は住む胸もなきさびしさを語るか涙
かはきし眼もて

衣かづきて人はねむれりかよわなる心にお
もき愁をおきて

○わがもたぬ性のひとつを君にふとみいでて○
つひに忘れえずなりぬ

＊

梢みな明るう照れり小鳥等の巣をくひてな
くひともとの野木

卵ひとつありき恐怖につつまれて光冷たき
小皿のなかに

枯草にかしら埋めて恐怖(おそれ)をば忘れむとすや
悲しき小鳥

君が眼よはじめてわれをみしやうに喜をも
てかがやきてあれ

○いくとせか君にいふべき言の葉をつつめる
胸をいだきてはぬる

春の鳥あかるきねしてかろらかに心を遠き
昔にさそふ

鳥は空にうたへりわれはふるさとへかへら
むとする日に似たるかな

○二重瞼(ふたへまぶた)さびしき君はかたへにて物縫ふ夜な
りこほろぎの啼く

○空にゆく悲しき心海に行くさびしきこころ
君にゆく心

冷笑のなかにかなしきほほゑみのふとしも
まじる君おもふとき

暗きより人よぶ海のかなたより人よぶ如し
冬の夜ふけぬ

日の前に小鳥うたひて平穏にこの一日はす
ぎにけるかな

くちづけし唇さびし別れては日の色をのみ
夢みぬるかな

杳として春の日照てりわれ知らず瞳しづか。
にうるほひて來ぬ

夕來たる遠きよりはたとほきより別れてあ
ればなつかしきかな

母の歌三首

母は子を灯(ともし)あかるきわが前によびぬさびし
さたへがたしとて

さびしさにそと戸をいでぬめざめたるその
瞬間の母のまなざし

妹をそとさしまねき母はいま呼吸したまふ
やうかがひてみよ

＊

病める魂濁れる空に小鳥ゆくそのさびしさ
を今日も思ひぬ

君が齢かたむきそめし悲しさをまのあたり
みて此十日へぬ

誰ぞやわが力にたへぬ人ありて涙をしふる
この行く春を

倦むに早くうつらふにまた早きわが性を悲
しむ春暮るる宵

誰ぞや來たれ誰ぞや來たりていたはれよか
く思ふことしきりなりける

わが思ふ子ならず君は幾人にこのかなしみ
をくりかへしきぬ

父の前われはも君が子ならずといひうるご
ときはけしき歎き

夏來ればはやくも秋を感じうるこの心もて
君をこそおもへ

みどりさわぐ眞晝の林ひとところまるう明
るき光おちたり

親の愛ことはりもなく批をうちてなほあき
たらず子は思ふなり

山ふたつ遠くむかへるさびしさに心とらる
るゆふべ〳〵よ

卵黄のはなたれてある小さき皿そをながめ
るぬ熱あるゆふべ

古き靴裏がへりあり母逝きしその日に似た
る厨のゆふべ

心さびしはげしき父の冷語をば厨のかたに
きく秋の朝

心うみぬこのさびしさをわかつべき人なき
ゆふべ秋風の吹く

悲しみの眼と眼かはして口固くつぐむに似
たる夜の山山

卓上の小ひさき塵のけざやかに眼にみゆ人
に別れしあした

われひとり眠りにいると思ふ夜のおほつか
なさや海遠くなる

母逝きぬ三首

日は稍々にかたむきそめぬ遠木立烟れり母
の脈たえし時

母の手のぬくみしづかに去りゆきしその終
りまでとりてありしかも

昏睡に入りし悲しき母の顔ながむる子等に
父もまじりし

＊

わが言葉みなうなづかむ君とおもひいふべ
きこともいはで終りぬ

ひそやかにわれをうかがふ悲しみの目ある
に似たる露つめたき日

人妻のすさみたる手をおもふだに涙ぞ走る
風吹くゆふべ

啼かぬ鳥さはにわたれる暗き空おもひうか
べぬのこされし子は

以上四十年秋より四十一年晩夏
迄の作

＊＊
＊

○つかれはてつめたき夜の灯のもとに横はる
時君おもひいづ

夫(つま)捨てゝ來しと戸をうつ君をのみ危み風の
夜をいねずあり

うれひつつ小坂のぼりぬつぐみたる唇(くち)につ
めたき血をおぼえつつ

をさなかりし日の驚きに海をみし心を君よ
失はずあれ

あゝ君は逃げし鳥なり嘴赤き海の鳥より賢
なりしかな

此二人つなげるものの涙にはあらじと知り
し心さもしさ

さびしさに追はるる如く戸をいでて明るき
街の灯にてらされし

僞れるわれをみいでしさびしさやまことな
りきと思へるなかに

俥くだり冷たき秋の街をゆく心いささか飢
ゑをおぼえて

來しかたも來しかたも皆美くしき僞りなり
きうら若き日の

君をのみ思はぬ罪かわれのみの君にあらじ
と知りし此頃

耳にふとあつれば石も聲たててなげくに似
たり悲しきゆふべ

わが前にひとすぢ匂ふ秋の灯よ遠灘の音よ
われをあはれめ

汚れたるこの美くしさ幾日してかくなりし
かや君知りしより

あはれなる君が匂へる眼の色よややすさみ
たる心のみゆる

水をみてながるる水をみてありぬ一日はか
くてありもえしかな

日の樹立あはれや顔を白き手におほひて泣
ける君をみしかな

今日も亦親をわすれて來たりしとあはれや
君はいたく泣くかな

ひたと噤み夜の時計をみあげたる瞳さびし
きひとりの父よ

渇きたる心の上になづくべき悲しみもなき
秋の一日

林檎かみぬ十月の朝庭の木の風鳴るをきき
柱によりて

暮秋の竹の林にわれたちぬ脊をながれたる
冷たき夕日

冬來たるほしひままなる心さへややいたみ
をばおぼえぬるかな

妹とすべきか妻となすべきか若き一人をえ
てまどひけり

若き子よ妻とよばれむ願ひの日まてるがあ
はれ眼にみゆるかな

木枯よ空にただよふ白き日よ目とぢてわれ
は俥にありぬ

いかにして家鴨は啼くや暗き町この冬の夜
をくくみごゑして

遠灘の悲しき音よねむらむととぢたる眼よ
り涙ながれぬ

以上明治四十一年初秋より
歳晩までの作

第二卷

明治四十二年の作

こころみに眼とぢみたまへ春の日は四方に
落つる心地せられむ

しばらくは妻となしても許すべき君をあは
れみ溺れそめける

あはれみかかなさけか君みれば捨てもか
ねたる歎きのみして

少女等はわらひてあればこと足れるさまな
りあはれ春のひと日を

今日もまた夜ふけて歸りよごれたるさびし
き顔を鏡によする

いつしかに日は中空にかかりありいでて寐
たらぬ顔てらさせぬ

やうやうに才なき吾をみいでしや一人ある
日の心もとなさ

かくまでになりし女の心さへ男は悲し容る
る能はず

血を見るにあらずば心飽足らず思はれもし
つ刺激なき日を

君をえて勝ちし心のわかやかに燃えぬとみ
しはつかの間なりき

海ひろに濁りて死魚ぞただよへるそが中に
みゆ君が亡骸

許されて行かばや海のつめたさに強ふる女
のつよき戀より

あやまちて君にまことを語りける僞りをの
み喜ぶ人に

わが胸にその前髪をあてしまま妻となる子
は泣きねいりする

去年よりは顔もかたちもわが思ふ姿にちか
く君なりにけり

いかならむ夢をみしやと逢へばまづとひし
癖などいまなつかしき

○あるときの喜びをもてつぐのはむすべもな
きかやこの悲しみを

○いつはりの涙なりともにじみ來よ命死ぬべ
く君の泣けるに

二人をばいかに小さき其胸にはかりてあらむ汝が妹は

眼をとぢていつも思ひぬ悲しみに終るが如き二人の戀を

おきいづればいたく心のつかれをばことはりもなくおぼえぬるかな

海あかり渚のかたに砂山をくだりぬこころ鉛のごとし

涙くだる冬の夜ふけの火もあらぬ冷たき部屋にわかれかへれば

みおくりぬ街のほこりにつつまれて遠ざかり行く君が小さき影

今日もまた夜となり夜もふけにけり冷たき唇にわかれてかへる

いかにしてかくはぐれたる心とはなりにけるかと君をながめぬ

○君は病む死ぬばかりなる悲しみをわれにも
強ひて味へといふ

瓦斯ひとつともれる下に君もありわれもあ
りけりふと驚きつ

別れ來て電車に乘れば君が家の障子に夜の
霧ふるがみゆ

ならはしとなりて君みぬ一日の不快にまさ
ることあらぬかな

おとなしうわがなすままになれよわが愛す
るものよ柔順の子よ

君をはなれ窓にもたれてたそがれの街をみ
てあり歸らばやと思ふ

なつかしき戀ひしさ去りて殘れるはままな
らぬ日の口惜しさのみ

あまんじて君一人をまもりし日まことすく
なきわが歎きかな

思ふことといはで終りしそのかみの幼き戀に
似て胸苦し

わが思ふままならぬとき憎しみのわりなく
つのるわかき女よ

うつくしき喜びといひ悲しみといひつるひ
まに陷りにける

わかれ來てほと息つきぬおのれただひとり
となりし心安さに

あはざるに如かじみざるに及ぶなし別れて
あらむうみそめし子よ

よそめにはいと幸とみえもせむ心はぐれし
かなしき二人

窓によりて夕となれば笛を吹く妻の弟をさ
びしがりける

わが愛に心足らひて倦みそめしこの我がま
まの子を如何にせむ

○戰ひに似たる思ひのひまもなく心ぞそそる
君おもふとき

われ愛すとかくは誓ふにおとなしうしたか
ふことの出來ぬ女よ

おごそかに隔つるもののあるをおぼゆ愛す
といへど戀ひすといへど

敵さへときにはなにかなつかしき思ひすな
るを君いとふ日よ

煤烟のうづまくをみてふと女戀しうなりぬ
夕やけの空

なすままになりし昨日の君おもふこの春雨
の朝ここちかな

このままに死なむといひし人はいま言葉す
くなに歸り行きにけり

うすけはひ昨宵(よべ)のままにてかへりゆくうし
ろ姿のことに眼をひく

なにとなく唯何となく忘れえぬ人のひとり
となりし君かな

みなほせど溺れし故にあらじかと思へど君
は美くしかりき

あなどりつさげすみつして捨てもえず捨て
えぬままに可愛ゆくなりぬ

かへりみて淡く悲しき心地する戰ひてえし
君と思へば

ややしばしさかりてゐよと願へども甲斐な
き人はわれを忘れず

何事も信ずる人をあはれとも飽足らずとも
思はれて來ぬ

やや痛きここちをおぼゆつかれたる額にさ
しくる夏の日のかげ

かはゆさに餘りてなるや故もなく君を憎む
に心つかれぬ

いさかひの後にのこれる哀愁にしたしみや
すきゆふべにもあるかな

しばし前憎しと口も利かざりしおなじき人
のいとほしさかな

世の常の女と君はなりしかや來しかたをの
みよく責むるなり

歡樂のはてにまつなる寂しさに今日ひとり
してゆきあひにけり

捨てらるるそのうら安さ願へどもまてども
君はうみあきもせず

君は泣くしづかに夏のたそがれの青葉の色
のしづみゆくみて

海の日の赤ただれたる懸崖に立ちし心を君
に敎へむ

雲光るとあるゆふべの別れなど窓によるた
びおもひいでぬる

○ただわれを信ぜよといへど君は泣くわれまた涙さそはれて來ぬ

○悲しみにうすく濁りし君が眼のしばしまともにわれをみるかな

○名も知らぬ花にむかひてしばしありこのみづからをあはれむ心

そちむきに手枕なしてすすりなきぬる子よ
われを憎しと思ふや

○誰が罪ぞわが言葉みな信じえぬ悲しき君となし終りしは

秋來たり九月となればこの心ゆるすといひし人はるかなり

わが胸のこの悲しみをわかつべき君は海よりいつ歸り來む

海の日に色づきし君が頰のあたりわづかに昨の悲しみゆる

＊
＊　＊

魂よいづくへ行くや見のこししうら若き日
の夢に別れて

荒みゆく心をしづにおししづめ「吾」をみまも
り涙ぐまれぬ

あはれみが二人をつなぐ悲しさをいかなる
時に君は知りしや

別れ來て晩夏の野に草を藉き少女のごとく
ひとりかなしむ

われ等また馴るるに早き世の常のさびしき
戀に終らむとする

襟垢のつきし袷と古帽子宿をいで行くさび
しき男

泣くひまに裁縫などする君ならずおしろい
の香を悲しがるかな

秋の朝卓の上なる食器らにうすら冷たき悲
しみぞ這ふ

信じられぬ男のもてるなげきなどなき人と
のみ君おもふらむ

わすれ行きし女の貝の襟止のしろう光れる
初秋の朝

すてなむと思ひきはめし男の眼しづかにす
むを君いかにみる

やや古き疊の上にちらばれる十月の日のな
かに横臥す

白き額にのこし來にけるわが熱き唇おもひ
夜の街をゆく

今朝もまた頭なやみて心倦むわづかにわれ
といふ意識あり

垢づける蒲團の上におほいなる蟲の如くも
まろびねにけり

君まどひおそれわななきすすりなく葉ずれ
の音の水の如き夜

をりをりは別ればなしもまじる夜の氣まぐ
れ心こほろぎをきく

秋の晝名しらぬ花をみてありぬ唇うすき子
の戀ひしさに

わが前に甘き愁を眼にみせし誘惑のありあ
はれ女よ

君ねむるあはれ女の魂のなげいだされしう
つくしさかな

いはれなく君を捨てなむ別れなむ旅役者に
もまじりていなむ

マチすりて淋しき心なぐさめぬ慰めかねし
秋のたそがれ

いづくにか捨てむとすれど甲斐ぞなき誇ら
ひに似し我が悲しみを

荒みゆく我れのこころをいかむともなしえ
で秋に行きあひにけり

うら若き日の悲しみに別れ來て塵とおなじ
き身となりにけり

さいはひに思はるる身は倦みはてぬ小鳥よ
來啼け日光のなか

幅ひろき醜きそびら何物のそびらとしらず
うす暗にみゆ

暖きあかるき底へ沈みゆくくちづけられし
若きたましひ

なにとなくそらさむとする冷たき眼なにご
とぞふと行きあひにけり

めさむれば秋雨のふる朝なりきうすあたた
かき悲しみのこる

物につとつきあたりたる思ひしつ二人をつ
なぐ悲しき力」

なにごとぞわかき女の魂の彼方に退きてわ
れをみまもる

あたたかき血潮のなかにながれたる命戀し
き身となりにけり

夕されば風吹けば木の葉散りくればうす唇
のなつかしき子よ

秋の夜のつめたき床にめざめけり孤獨は水
の如くしたしき

かへり行く女よ汝が肩あげのさびしきあと
にほこりうくみゆ

つつましう彼の若き日の歡樂にいとおとな
しう別れきにけり

菊のにほひむさぼり吸ひぬ晩秋の日光のな
かのさびしき男

わかれ來て飢ゑし悲しき野の獸けものの如
く秋草にぬる

崖上の秋の梢をみてありぬ別れしあとの午後のひととき

悲しみに別れ涙に別れ來し心のくまを木枯のふく

冬の朝まづしき宿の味噌汁のにほひとともにおきいでにけり

受話器とるあまりにとほき海の音の君が言葉にまじるここちし

吸殼の白くたふれし秋の夜の火鉢にもたれ風の音きく

秋の宵机の上の白菊のにほひをかぐやわかれしをんな

うつりゆく女の心しづやかにながめて秋をひとりあるかな

つかれたる皮膚にしづかにこほろぎのねのひびくなり獨りねの夜を

女ゆゑねたむは常といひながら君あまりに
もはしたなきかな

こなたみつつそのまま街のくらやみに沒し
ゆきける黑き牛の顏

やすらかに汝が夫を愛せよといひやりしよ
り二秋をへぬ

黃ばみたる桑畑の上に晝の富士ながめてひ
とり口笛を吹く

またしてもわがままゆゑの嫉みごとほとほ
と君に困じはてける

うらかなし歸りて君が父の前いふいひわけ
のおぼつかなさも

屋根上を風さわぎ行く崖下のつめたき家に
石の如くぬる

曇天をとほくくまどる町あかり冬近き夜の
窓にひとりみる

赭茶(あかちゃ)けし帽子ひとつに悲しみをあつめしご
ときさびしき男

黄に枯れしものの蔓などからみたる斷層面
をあふぐ冬の朝

おもふままなすべきことをなし果てし後の
心のさびしかりけり

煤烟の低うながるる街を行く眠不足(ねむりぶそく)のつか
れし瞳

うす暗き校正室の北窓にもたれて夜をまつ
男あり

何物にか踏みにじられしあとに似て自棄の
心のやるよしもなし

あやまちて切りし小指を冬の夜の灯のもと
にみるうらさむさかな

うら枯れし一面の野に降りそそぐ日光をみ
るひとびとのかほ

うたたねよりさむれば太く汽笛鳴る脊(せな)をな
がるる曉(あけ)のさむさかな

昨宵(よべ)のままとりちらされしあかつきの座敷
の隅に物をおもへる

あがなひし命の愛のおほつかなあたひ乏し
くなり行かむとす

うすにごる初冬の海にふりそそぐ日光をみ
て物をおもへり

くちづけを忘れし人はさびしけに一人裁縫(しごと)
の針はこぶかな

木に花咲き君わが妻とならむ日の四月なか
なか遠くもあるかな

君かへりし後のつめたき崖下の家に落葉の
音ふけにけり

あやまちし來しかた君を傷けし來しかたを
して葬らしめよ

あたたかきかかる思ひを君來たる午後まで
いかに守りてあらむ

わがままはすまじと昨日ちかひしを忘れし
人の憎からぬかな

いくたびか君をあやまち傷けしそのはてに
して別れむとする

君かへる夜の電車のあかるさを心さびしく
おもひうかべつ

わがふるさと相摸に君とかへる日の春近う
して水仙の咲く

君つれて君も知るなる人妻の初戀人の鄕里(さと)に
にかへらむ

わがままの心おさへて二人ありみじかき冬
の日もくれにけり

すこやけき汝がうらわかき眼の色につつま
れてあるわれなつかしむ

いかならむものや二人にもち來す四月の空
のうらなつかしさ

君をつつむあかるき光幸に妻となる日をい
かにまつらむ

君泣かばとおもふときに君泣かず言葉すく
なに物縫ひてあり

投げいだせし手につたひくる冬の夜の冷た
さにふと君おもひいづ

冬の夜の街路(がろ)をいそぐ旅人の俥のあとをわ
れも走らむ

ひとりねむる君が肌の香に久にわかれて白
き敷布のうへに

悲しみにわかれて行かむ匆忙(そうぼう)の生活ぞわれ
をまてるに似たり

いつしかに頬杖つきて眼を伏せぬ水仙ぞに
ほふたそがるる部屋(へや)

嵐なす頭のなかにあはれなる女の顔の小さ
くただよふ

水の上を遙あかるき悲しみに電車ぞ走る木
がらしの夜

◎

君によりをしへられける悲しみに別れてさ
らに悲しみをえぬ

わが世界君にはみえず魂のふたつまどへる
悲しさに生く

ありなしの水仙の香のただよへる暗き座敷
に君おもひ寢る

なにものもわが煩ひとならぬ日の日光をみ
るうらなつかしさ

白菊の青きつぼみをにぎり居し君がをさな
き兒のなつかしさ

いま一度うなづきてわれにみせよかし言葉
すくなきさびしき女

弱かりしふみにじられしそのままにあれば
ありうるわれなりしかな

われは唯默してあらむしづやかに「吾」のゆく
へをひとりながめむ

＊

風暗き都會の冬は來りけり歸りて牛乳のつ
めたきを飲む

火の氣なき宿に歸りてくらやみにマチをた
づぬる指のつめたさ

みづからをいたはることのおろかさにおち
なむとするあはれ女よ

あたらしき心となりし喜びに思はぬことを
口ばしりする

乳色のさびしき花をみいでけり君が愁をま
ぎらすによし

遠く來て遠く消え行く葉ずれの音つめたき
床にこほろぎをきく

やはらかき女の唇の印象のさりがたき日の
心わづらひ

別れ來て外套の襟に顔うづめ橋上に立ち冬
の川みる

古マント茶色の帽子かくてわが悲しみは足
る、人に別れたり

かの別れ久しくなりぬかがやきて遠方にあ
り昔の人は

磯山の砂のぬくみを忘れえずねながらつみ
し名知らぬ草も

ておひたる獣の如く夜深くさまよひいづる
男ありけり

自棄の涙君がまぶたをながるるや悲しき愛
にさめはてし頃

別れむとする悲しみにつながれてあへばか
はゆしすてもかねたる

おごそかに障子の外にせまりたる冬の夜深
しゐひざめにけり

あかつきの柱つめたく脊を支ふなかばはね
むり物をおもへる

濠端の電柱にもたれ春の夜の空のしたなる
人となりにけり

あかつきの空をながるる霜あかりねむらぬ
人の眼にいたく泌む

君思ひ窓によりつつ牛乳を飲みうすあたた
かき日の光吸ふ

君にわかれ町の小坂をのぼるときやや胸ぐ
るし疲れをおぼゆ

みづからをあはれみそめし甲斐なさよ酒に
したしむことをおもへど

をしむなく愛せしゆゑにわがままとなりし
子なりと君が眼のいふ

たのしまぬ心いだきてかへりけり机の上に
かしらうづめぬ

うたたねよりさむれば障子ほのしらみ水仙
の香の悲しくまよふ

おもひやる亢奮したる悲しみを胸にかかへ
てかへりし女

あたたかき汝がだきしめに馴れやすきわれ
の心をのがさしむるな

こころしてわれを愛せよまもれよとこのわ
がままの男のいひける

去年よりはおしろいなれし君が顔こなたに
よせよくちづけをせむ

日にむかひすぐに立つなる如月の木立のも
とに物おもひする

＊

濠端の貨物おきばの材木に腰かけて空をみ
る男あり

みづからに愛想づかしのせらるる日君を負
擔に思ひわづらふ

なにごとぞ驚くことのまれになり物忘れせ
しさびしさまさる

＊
＊ ＊

あはれなる家畜のごとく俥にてはこばれか
へる別れしゆふべ

夫よりも戀人よりも子をおもふやさしき母
と君やなりけむ

何故に泣くかや君は遠方に夕日の木立かが
やくをみよ

物忘れよくする人の瞳ぞ悲し木立の中にひ
とり土踏む

悲しとて涙にそむき別れたる男は庭の樹を
強く抱く

君が眼のなかにただよふはづかしき喜を吾
うかがひ知りぬ

物思ふ女の白き胸かけの日に光るなり野に
草ぞ萠ゆ

春の雪晴れしあしたの日光のあかるさ心行
きどころなし

汝(な)がしろき彈力(だんりよく)に富む腕(かひな)よりこころよきな
し三月來たる

わが部屋の障子の外にしのびよる衣(きぬ)ずれの
音(ね)のこひしき夕

しづやかに若草の上を歩ませぬ女よ汝(なれ)が愁
ひ顔よし

日光をうれしみ野より野をあゆみ疲れて草
のつめたきにぬる

健康をよろこび春のやはらかき日光を吸ふ
林をいでて

一日のなすべきことをなしをへてゆふべし
づかに人をまつ身ぞ

あたらしう生れて來よとせむれども君は昨
日の女なりけり

眼の前をゆききするなるうす甘き風のなか
なる女の瞳

一人をば守り一人にまもられてあるをねが
はぬ二人なれども

君が乳(ち)のしろきをおもふ日光のなかに光れ
る木蓮の花

みどり濃き林に入れば君が眼の光なやまし
くちづけをする

うしろよりわが唇を吸ふ前髪のやはらなる
人え忘れかねつ

いかにして沈める眼ぞと妻となる子が右の
眼を輕くすひける

いつしかにわが悲しみは濁りけり逃れしも
のを追ふに疲れて

第三卷

明治四十三年より大正元年までの作

みのこしし夢をいだきて嫁ぎ來し女の夜(よる)の
うつくしさかな

疲れたるわが身になほもまつはれりうす幸
ひをゆめみる心

ぬぎすてし女の衣のくづれたる上にただよ
ふたそがれのいろ

むしあつき女の部屋にちらばれる赤き色み
るなやましさかな

うまごやし花さきそめぬ小ひさなる家のあ
るじとなりしその頃

初夏の野は光るなり大麥のかぜのなかなる
汝があかき唇

しづやかに夕饗をなせる妻の前わがままの
小さき心ただよへる

追るはるごと夫婦となりぬ麥の穂にかなし
みおぼえ旅にいでにけり

初夏の雨にぬれたるわが家のしろき名札を
みればさびしき

夫となりてなにかさびしく物足らずあはれ
にわれを思ひいたりぬ

こころよく肥えてゆく日の物づかれ六月の
風やはらかく吹く

日ごと彼の汝れとあひたる町はづれ野のひ
ともとの木に風青し

たやすくは別れがたくなりしよりあはれさ
まして可愛ゆがりける

幸ひに疲れていつかうみそめぬ大麥の穂の
あからみにけり

數莖の麥の青きに悲しみのまつはりてあり
たそがれの部屋

栗の花しろくふるへて咲く日なり父よりう
けし血ぞ身をせむる

暗き方にのみさまよひし魂のいとめづらか
に君をみまもる

＊

こころよしやまひあがりのやや痩せてふら
んねるきし君をいだけば

＊
＊＊

赤錆びし小さき鍵を袂にし妻とあかるき夜
の町に行く

夜の町のあかるみをゆきわが家をふとおも
ひいで心かなしむ

あたらしき蚊帳のにほひの秋近き寢ざめに
旅をおもひいでにけり

今日もまた人に別れしここちしておそ夏の
野の草のいろみる

おそ夏の雲は地平に赤かりき背に草冷えの
つたはりてくる

物飢えしここちにまじる秋草の刈りほされ
たる日向のにほひ

こほろぎよ彼の崖下のかくれ家の秋のひと
りの妻となりにけり

＊
＊＊

秋はきぬ日光のふるかたにのみ這ふ蟲のごと生きてありにけり

なるままにならむ女ようむなかれ愛することを忘るるなかれ

こほろぎよ無智の女のかなしみに添うてねやどに夜もすがら啼け

口笛を吹く唇のさびしさよ友の帽子のつばさがりたる

日だまりにただよひてつよく秋ぐさのにほひいでたるなかにねころぶ

けがれたる身をたましひをしづやかに眺むるにより秋ぐさのうへ

わが前によこたはりたる暗き背のけだものに似る人間に似る

家を捨て妻わかれして行くところ知らずと
いはば涙ながれむ

おそ夏の草にいねけり野のなかの踏切番の
小さきむすめは

秋の夜の更けし隣りの妻の部屋帶やとくら
しこほろぎの啼く

うすら冷たき野菜のにほひながれたる夜の
厨に秋の水のむ

そそくさと白くぬきたる葛の葉の帶する妻
のうしろでをみる

＊

黄のだりやあかるく光る十月の日向にいで
てふところでしぬ

裾短かにたくしあげたるわが妻の白きかか
とに水ぬれひかる

何となく物の匂ひのまつはれる知らぬ男の
われたづねきし

風よどむ岡の麓のあきぐさにおきし帽子に
日の光ふる

ふるさとの師範に入りし弟の小倉股きし姿
あはれさ

人並みに生きなむとする願をばいなみがた
かり弱き心は

以上四十三年の作

＊＊＊

やるせなくわれとわが身のいとほしく自棄
の心をなぐさめるたり

あかるみに這ひいでなむとなる蟲のさびし
き顔に日の光さす

泥水によわりし魚のなかば浮きしばし動か
であるたよりなさ

運命は遠まはりしつわが顔をうす笑ひして
みてありしかな

ておひたるとさか顫はせ眼をとぢし鶏の顔
をわれはみてあり

曇り日の青草を藉けば冷たかり自愛のここ
ろかなしくも湧く

われをみて嗤かぬ家畜の顔さびし乾ぐさの
香に日の黄ばみゆく

無理強ひにわが歩み來しそのあとを歩まさ
むとする悲しさなりし

大きなる男がおのれ一人をば泣き顔しつつ
いたはりてあり

よなよなと暗き世界にただよへる疲れし魚
に似かよへるかな

あわてつつとりつくろへる眞顔をば君はす
るなり母親のごと

栗の花亂れ散りたるあじきなさわが生活の
日かげるごとし

子なき妻が寢ざめ寢ざめにすがれゆく一叢(むら)
しろきくろばあの花

夏草のすえゆくにほひこそここに疲れし花
のしろく光れる

叱られて取りちらしたる截(た)ちさしの露西亞
更紗のなかになく子よ

川波の光るがに似てとりとめもなきかなし
みの吾さいなむも

一莖の草ゆらぐなりうすあかり夜の闇にぬ
るわが顏のうへ

背敎者の流すなみだの苦からむうすくもる
日を紫陽花のさく

たそがれの暗綠色の野のなかに打ちもだし
つつ草刈る男

夏草を刈る大鎌のこころよさ地平に雲の白
く光れる

長き尾のさきをみつめて耳たてし顔黒き猫
の瞳のけはしさ

そらあかく嵐をつつむ夕空の大きさ吾をお
びやかすかな

工場の紙型の上におかれたる石竹の花の赤
きがかなし

石竹の一輪あかく鑛油のにほひなつかしは
つ秋のあさ

幅ひろき赤き光が煉瓦塀より反射してあり
川船のうへ

日に焼けし男の顔にうかびたるにがきわら
ひのかなしかりけり

工場の笛とがりころがして空に鳴るはつあき
の朝の人厭はしさ

代赭(たいしゃ)いろの地がひろぐ〳〵と連れり絶望に似
しかなしみきたる

籐椅子にぬれば冷たし秋もきてわれに添ひ
伏す廊下の片隅

野分きて地に仆したる秋草の仆れしままに
花つくるあはれ

とぎあげし米の白きに秋はきぬ厨の甕のう
す光る水

赤茄子のうすく切られし白き皿秋のあした
の牛乳(ちち)のつめたさ

くもり日の如くかげりてたよりなき我が心
吹く初秋のかぜ

秋がみはる大きなる眼にうつりたるわが生
活のさまのあはれさ

黄緑の野草を刈れる人人のかげうごくなり
秋風のなか

籐椅子より廊下に垂れし片足にはひあがり
くる秋のつめたさ

前垂のしろきはしにて涙ふくことおぼえけ
む妻のいとしさ

川上に横臥す山のはるばるとみえてかなし
き船にのぼれば　（二首多摩川にて）

秋風の川にむかひて柿くらふ男の顔のかな
しげなるも

そこここにゆきつまりたる生活（くらし）する人みゆ
るなりはつ秋の風

ほの青き秋の嫩葉（わかば）にふれてみぬかぐろき土
にたてる榛（はん）の木

うちもだし竹をはぎては籠をはむ男なつか
しはつ秋のかぜ

ひとすぢの路は林にいりにけり秋の木の間
に水うす光る

秋風吹くあかるく野木の木の間より白く光
れるてんとの一列

三四人そがひになりて刈草を日にちらすな
り秋風のなか

ひとところ夕日の光濃くよどむ野の低き地
をなつかしみゆく

敷布しろき秋の夜床にいねにけり庭樹の風
のわがこころ揺る

雨手もて汝がにほはしき顔おさへみればあ
はれや涙やどしつ

瓦斯燃ゆる夜の寂しさの燃ゆる音かわが悲
しみの澄みてゆく音か

冬くれば汝が神経のうすひかり細かにふる
へ心に觸れくる

冬の朝くちなしいろの封筒のひとつ入りあ
る門の受函

ひとところ人の藉きたる野の草のくぼみに
まよふ夕日のひかり

一もとの野木をいただきてゆらゆらとゆれ
ば落葉のわが顔をうつ

髪をすく汝がゆびさきのうすあかみおびて
冬きぬさざん花の咲く

ものうくてくづれしごとくうづくまるわが
影を右にうつしぬ冬日

冬の朝小牛のごとき犬がきておへども去ら
ず地をかぎてあり

兒なき家にゆふべあかるく瓦斯ともり冬支
度する妻のいとしさ

白塗りの死亡室の扉にかけなげてくろぐろ
たてる冬木立かな　（二首病院をとひて）

以上明治四十四年の作

＊
＊ ＊

疲れたる生命のおもみ行くかたは光りうす
らにまよふ世界か

あらはなるか黑き土のふくらみにひともと
たてる木こそみえぬれ

ふと彼方連山の上黎明の青さに似たる空こ
そみゆれ

冬のあかき夕日に死ぬる小鳥あり呼吸する
胸のふくらみをみよ

木々の枝裂かれしごときいたましき心きた
りてわれさいなめる

崖下をいまぞ汽車ゆくとびおりてみずやと
誘ふたはむれ心

犬つれて野にいねにゆくわかものののうしろ
姿に冬日があたる

日をあびて寢ぬる牛みればかはきたる心しづかに潮さしきたる

蜜柑むくうすらあかみをおびし手のちひさき他所の兒のなつかしさ

牛を見に霜ふみて行く初冬の朝のこころのなつかしさかな

一月、犬吠岬に遊ぶ、歌十七首。

摘みとればはやくろぐろと枯れそめぬ冬磯山の名も知らぬ草

黑潮の流れはやかる外海の岬にきたりふゆの花つむ

冬の雨潮をふくみてしとしとと冬磯山にふりいでしかも

外海の冷たき潮のしみとほり指にぞからむ
手をひたせれば

外海(そとうみ)の透きとほりたる一色のみどりににほ
ひ燈臺の立つ

赭土(あかつち)の小山のほればしらじらと犬吠岬の燈
臺ひかる

夕まぐれ犬吠岬の燈臺の陰影をふむたびび
とわれは

袖ひろき旅舍の寢まきに身をつつみ赭土山
に海みるまひる

伊勢路が浦おもひでのためうす青き手袋の
娘(こ)に貝をひろひぬ

物いへば小さき兩手に顏かくす兒を脊おひ
たる愛(かな)しき少女

東京の少女をみたるなつかしさ荒海のほと
り貝をひろへる

渚べに埋れて長く魚のごとよこふしにける
白き流木

渚近くしらけて砂に横伏せる流木のうへに
腰かけにけり

日の暮れの光りをはらみはてしなく海ぞふ
くらむ灰白色に

船蟲に似し蜑夫の子らそそけ髪風に吹かせ
てむらがりきたる

わが手より桔梗色せる手套に指をもれゆく
うす光る砂

わが指に汝が手套の色染みてありやとおも
ふ冬のかはたれ

小鳥の歌

おそろしき人のこころに觸れぬやう世の隅
に妻よ小鳥飼はまし

わが小鳥飢ゑたる眼して啄まず巣ごもりて
あり日のあかるきに

うすくらきゆふべわが家の片隅にあはれ小
鳥の啼きいでしかな

色褪せし鳥の脱毛の散れる巣に鳥あらず日
の光もささず

わが翼わが嘴をもてかきむしるもの狂ほし
き小鳥のこころ

夕されば黒き布もてつつみやる籠の小鳥の
ものあじきなさ

わが小鳥いつしか啼かずなりにけり夏ふか
みゆく青樫の家

とまり木にならびてなかぬわが小鳥翼よご
れつ餌もついばまず

一壺の水あたふれば全身を打ちふるはして
啼くか小鳥は

啼きもせで一夜しづかに死にゆきし小鳥の
屍日にさらしけり

黒き布もてつつまれし籠のなかにして一夜
小鳥の死にゆきしかなし

死にし鳥のとぢし瞼の思はれて眠るとすれ
どわが眼うとまし

以上明治四十五年の作

函根芦の湖畔に遊びて歌へる歌

おそ夏の暗緑色の山みればわが悲しみは痛
みいでにけり

一面に夏雪草のしらじらと咲きつづく山べ
わが越えて行く

山上の濃霧のなかに君が摘む夏雪草の花の
ましろさ

君が手の夏雪草に霧ふれり箱根山べを今日
越えて行く

相模の山箱根を越ゆる旅人のうら若き妻が
つむ草のいろ

青山の一もと青木霧かかり旅人の眼にさぴ
しうつる

旅人は淋しき世界眼にうつし青草山を打ち
越えて行く

この二人山深う入り歸らざる姿にみえて悲
しかりけり

青山の霧ふかみ行く日沒に行きなやむなり
旅人の妻

しらじらと物をみぬ眼にうつり來る夏草山
の一もとの花

山頻白濃霧のなかになか空に物刻む如き音
をたて啼けり

霧やがてはるれば山はうすいろの藍をながしぬ、日の色悲し

名も知らぬ山ふところの日だまりの唇黒き花のかなしさ

霧ふれば山上の草みなしろし二子山べを我がすぎて行く

犬うどの毒をふくむといふ花に日が燃ゆるなり頬白の啼く

むつとして草いきれする山あひに入りぬ涙のにじむ心地す

青山の山ふところの旅籠屋のともしびの色にまもられてぬる

かへらぬ夢悲しむ如くたえず啼く湖近き山の黒つぐみ鳥

山々は今ぞ暮れゆくやや少し高くそびえて青空のもと

杳として水あかりする青山の麓の湖邊旅人の行く

うす赤き暮靄のなかに黑々と暮れて行くなり彼の連山は

山上の湖の岸邊の旅籠屋に君は寢るとて夜の帶をとく

わが妻がかけし蒲團の裾赤きあたりをかろくふみてみしかな

我が部屋にながれいるなる山霧のなかに黄いろく灯をともす妻

一もとの幹白き木のたてるあり洋妾のすむ湖岸の家

つながれし犬が長鳴く驛路に秋風をきく古き旅籠屋

夜の空に黑くにじめる青山のふもとの宿の灯のしめりかな

明日越ゆる山に光りのうすくさし暮れゆく
がみゆ旅人の眼に

雜囊をかたへになげて草にぬる青年(わかもの)の頰の
日の色の濃さ

以上大正元年の作

第四卷

大正二年の作

沈默ぞわれをいたはりなぐさむる今日も草
場に來て見入る空

わが行くはひろき草場のはつ冬のうす日だ
まりぞ物思ふによし

黄に枯れしひろき草場のそのなかにわれ空
をみて今日も坐せりき

妻もなく仕事もあらず家もなき一浮浪者ぞ
草場にくれば

我がこころの故郷つひにいづかたぞ彼の落
日よ裂けよとおもふ

打ちもだし酸ゆき蜜柑を吸ひにけりたゞわ
けもなく悲しかりしに

塚の如くつまれし草に火を放て焔ちぎれて
青空にとべ

夕日赤しわが歸る家に氣病みして君はぬる
らむ、あぢきなき世ぞ

素直なる心守りてありし日のわが悲しみに
あふよしもがな

日をつつみよなふる山の麓邊にわがししむ
らを生き埋めせむ

護謨の樹の青のひともと眼に遠しわが世の
はてにゐがく護謨の樹

あかあかと心狂ひてとびめぐる夕日に投げ
ししむらのうへ

沈默の黑き木立に空遠く日はてりきたり日
はかげり行く

壁の如く暗き木立のそそり立つほとりに行
きて心かへらず

夕日よ、夕日よ、夕日よと心狂ほしく渦卷きて
行く空燒くるかた

入日あかし農夫が負へる枯草に火を放ちな
ば慰むべきに

あはれわれ落葉林に焚火してこころよろこ
ぶけものの如く

うづくまり林のなかに火を焚けばわが心さ
へあたたまりきぬ

「故郷」にかへるおもひか火を焚けばあたりあ
かるし落葉林は

ゆふべ林に焚火をすればあかあかと木々の
肌の眼にせまりくも

闇ふかき林のなかに火を焚きつややとほざ
かりみてありしかな

みちたらへる心に似たるあたたかき悲しみ
きたりわれ醉はしめよ

とある夜、街にて七首

我が前に窓かけをひけ暗くひけ鬱々として
物を思へる

わが前の黄の窓かけのややにくらくなりゆ
く暮れぞ物思はるれ

瓦斯くさき暗き宿屋の部屋のうち陰惨とし
て夜をめざめたり

水銀の如く心は重かりき二月の夜をひとり
めざめつ

あかつきを心に感じ感じつつ別れの手紙か
きてゐしかな

走り行く舗石の上、走り行く深更の町われと
かなしく

壕ばたのくらき宿屋の二階よりみれば悲し
や黒き烟突

病院にて妹の手術受けしとき

手術後の魔醉にあをみわたりたる妹の顔を
無言にぞみる

手術後の顔にかけたる白布のなまなましさ
ぞわが心刺す

大川の薄暮の光りうすらかに來てはまよへ
り黄の窓かけに

たそがれは烟の如くなびきたり大川の水の
光りかなしも

大川の水のにほひのうすらかにわれの心に
沁みわたるかも

＊

雪の上に空がうつりてうす青しわがかなし
みぞしづかに燃ゆなる

ほと光空よりきたりうす青き野の雪のうへ
燃えて消えにき

大正二年三月、三浦半島をめぐる。その
の折りの歌十九首

三浦三崎の女盲人が路ばたにうづくまりゐ
て菜種黄に咲く　以下三崎にて

日が暮るるやと空をあふぎて歎きたる女盲
人の悲しきかなや

路ばたに居すはりて泣く小盲人を女と知り
て悲しかりしも

青き菜種の莖を喰みをる蓬髪の女めくらに
日が暮るるなり

海を越え三崎に來たり海をみず女めくらを
ひたにかなしむ

枯草のなかに萌えたる砂山の青草を摘み青
草をつむ

冬草の青をことごと摘みすてむ岬に來たり
うら悲しきに

海草を干せる砂丘に日は赤し海にむかひて
思ひしづめる

房州の山燒くるみゆ行き暮れてこの砂山に
身をなげにけり

古壺のかけらに似たる夜の港亡靈の如く汽
笛ぞ鳴れる　以下浦賀にて

三味線の音のみが生きて夜の古き入江の町
をまよふなりけり

夜泊りの黒き汽船のなかに鳴る鐘の音小さし古入江町

ひたひたとひたひたと浪夜もすがら古き入江に鳴るは悲しも

夜あくればまじまじとして日は照れり廢船のうへ古き入江に

對岸の古き家並に日が照れりよごれし旗の風になびける

さ青なる入江に浮ぶ船にのみわが悲しみの流れてつきずも

蹌踉として人は歩めりうすくらき入江に添へる陰影おほき町

暗き沖へ暗き沖へとわが心ながれてやまず海の鳴れるに　鎌倉にて二首

海鳴りをきけば心に何ものか入り來るごとし暗夜の渚

とある農家の暗き厩に、低く垂れた
る頭を、左右に絶えず打振れる病馬
をみたり、歌十一首

ゆふべなりき暗き厩に亡霊のごとき馬ゐて
頸振れりけり

みてあれば心よろめき獣めく、暗き顔なし頸
ふれる馬

頸ふり馬頸をふれるに日は暮れぬ厩のまへ
の一もと臭木

夜もすからねむらで頸を打ちふれる獣を思
ひこころ慰まず

飼主も氣が狂れにしときにけり臭木の花
の青じろむころ

紫がかり黒みをおびし臭木の葉重く心にお
ひかぶさりぬ

蕚赤く花青白う叢りて日蔭にたてる臭木の
寂しさ

黒みたる廣葉を風にひるがへし日の光みぬ
一もと臭木

頸ふり馬いまだ死なざり臭木にはうす青み
たる實のなりにけり

呼吸つまるごとし氣がふるゝ如し臭木の葉
一葉をつめば顔にあつれば

黒みたる臭木の葉もて太陽を掩はむとする
うら悲しさに

野の監獄の歌

來てみれば我が眼に近く監獄ぞ大空のもと
野にあらはなる

囚人等己が棲家の監獄の屋根つくろへり五
月の夕日

日光の赤濁れるにわが心監獄のそとを駈け
めぐるなり

あはれなる人間どものふるさとの悲しから
ずや夕焼くる空

粗き日の光りのもとに監獄ぞあらはに立て
る煉瓦塀ながし

囚人等牢獄に捿めり蜜蜂の巣にこもるより
あはれなるかな

日光を十年もみずばいかならむ彼の屋根の
もとに捿める人おもふ

日光を見ぬことよよながくして空の青さ
の眼に深むらむ

囚人等輪をなし歩む牢獄のゴオホの繪をば
おもひいでにけり

監獄のなかにて鳴れる小さき鐘わが心うつ
野に日赤けれ

人間のかなしみに醉ひうたふらむ望樓に灯
の青む夜ごろは

眼病院にて七首

我が父を眼病院にともなひぬ冬青の葉のなかの白き病室

父の眼をみぬやうにして病院の大時計をばみてありしかな　控室にて

冬青の葉のべつたり濡れて病室の窓の硝子を青く塗れるも

硝子越し冬青の青葉の濡れたるがわれの心に觸るる心地す

冬青の葉のぬれしがうすら光るなりましろき病室にたそがれぞくる

雨の日の控室の隅にうづくまれる男の見えぬ眼の悲しさよ

すがめなる若き支那人の色あせし青色の服雨にぬれたる

狂病院の歌二十三首

狂人のにほひからだにしみにけり狂病院の
廊下は暗し

扉あくればそこにも強ききちがひの匂ひた
だよひ皆默したり

魚のやうな眼のみ生きたる四五の顔こなた
みてあり廊下とほれば

一室のうちに數人のきちがひが皆立てりけ
りむきむきになりて

蓄音機の喇叭の前にあつまりしきちがひど
もの顔の暗さよ

彼等のほけたる顔よかなしきは人間に似る
生きものにして

きちがひの眠れる部屋にあかあかと狐のか
みそり一面に生えよ

長き廊下の彼方の暗き一室の扉がばたり、と
とざされにける

ばたばたと蛙のやうに部屋ぬちをとびある
きたり彼等の一人

「此の男は直きに死ぬる」とまのあたり醫員が
いへどうごかぬ瞳よ

その男の動かぬ魚のやうな眼がわが背をみ
ずか部屋をいづるとき

眞面目なる常人の顔をしてゐたり精神病學
をよみし彼等の一人

よくみれば瞳の底ひ夜の海の光りをふくむ
彼等の一人

とぢし眼の顔を打ちふり打ちふれり壁にむ
かひし彼等の一人

うづまりし彼等のさまは穢れたるかんぱす
に繪の具なすりしごとし

あかい、あかい、あかいと女きちがひがきちがひ文字を書きてゐるにけり

さらに扉ひらけば女狂人の頰あかきがゐて物いひにけれ

日没ちかき廊下にならび飯をはむ彼女等をみたりはじめてみたり

めとづれば眉間のあたりきちがひの顔ぞうづまく風の如くに

狂病院の玄關前の小石原ふめば小石のわがこころかむ

歸りて二首

狂病院の扉のはんどるの冷たさをいま猶指は感ずるごとし

狂人等晩夏のあかき外光のなかにうよめく運動場をおもふ

＊
＊ ＊

沈思よりふと身おこせば海の如く動揺すな
り入日の赤き

このやうな平地の上に赤い日よ生きものの
やうに落ちて來よかし

草の上つとたちにける我が眼のうち夕日鋭
く裂けてみえにけり

野の烟突を這ひおつる日の大きさよ蛇の屍
の地に裂かれたる

落日に烟れる世界一面に野はただよへりわ
が眼のあたり

はつあきの野の外光に火葬場の烟突が赤し
蜀黍畠

野の並木黑く列なすあひだより病めるがに
たてり赤き烟突

ひとところ九月の夕日よどめるに野の烟突
は烟を吐かず

烟吐かぬ赤き烟突の直ぐ下の畠に農夫が蜀
黍を刈る

蜀黍を車に積みて物いはず農夫烟突の方に
行きけり

＊＊
＊

妻としてとある日くろき畑道をゆきけりの
びる路傍に青し

路ほたの刈草の上に農夫の兒農夫の兒とし
蜀黍はみてゐき

もろこしをとりつくしたる黒土の畑中に立
てり農夫の妻は

農夫の兒畑中道の窪地にてのびるつみをり
のびるはくさし

蕎麥の花つめたくしろく眼の底にのこれり
妻とかたらひゆけば

路ばたののびるをつめば忽ちにその強き香
の夕日に散れり

秋の日に二人あらはに照らされて歩みてる
たり赤土路を

吾等悲しき職業を捨てむと語らひつ黄の秋
草を踏みて歩みし

野の牧場の牛飼男われに脊をみせて日向に
草刻むなり

日のささぬ牛飼部屋の板敷を牛が蹴るらし
ゆふべ近きに

けだものの強きにほひにつつまれて秋草の
なかに牛をみてゐるし

武藏野の古驛路の遊廓の日にさらされて向
ふにみゆるも

古き町いでて一路の黄の光り稻田のなかを
われら行きにけり

十一月の日光のあまさ農夫らの顏の眞面目
さ麥まきゐるも

武藏野の野少女どもの稻を刈る鎌日に白し
唯稻を刈る

稻を刈る彼等野少女稻を刈る彼等若者日に
眞向ひに

田の畦の黑きを走る野少女は鼠のごとし日
はてりかげる

畑中道向ふより來し赤犬の何おもひけむふ
とかへり行く

火葬場の烟を吐かぬ烟突を背にして吾等口
つぐみけり

石積場のすみにかがみてさびしげにかたれる人の妻のいとしさ

野の夕日吾等淋しき幸ひにいたはられつつ歸りゆかなむ

青樹の歌

憂鬱の青のゆづり葉言葉なく打默したる青のゆづり葉

空青み、われに親しき冬の日の光はそそげゆづり葉のみに

我心鋭く冷たく生きてあり親しきは冬の木のさ青なり

葉の青く莖あかみたる冬の木ぞしたしきし
たしきわが冬の木ぞ

ゆづり葉は黄葉することさらになし彼のう
まずめの寂しさに似て

黄葉せぬ樹を植ゑしめよ我が思想にしたし
き冬の木を植ゑしめよ

＊

我が庭に一もと青きゆづり葉の樹を植う初
冬の日光ぬくし

うす赭み濕れる土を深く堀り葉もたわわた
るゆづり葉を植う

ゆづり葉は青き葉と葉と諸向きに打ちかさ
ね冬の日にたてりけり

掘りかへされし土の上にそと我がぬくき掌
をおきてみぬ初冬の日光

數人の男きたりて打ち默し木を植う、青き木
をめぐりつつ

新しく植ゑられし木の前に立ち日をあふぎ
みぬ初冬の朝

妻よこのゆづり葉の青く黒みたる葉の冷(つめ)た
さに指ふれてみよ

＊

太陽の強き光りに飢うる樹のその葉の青く
廣きは悲し

日のひとつかかれる空になびきたる護謨の
林をつねに思へる

護謨の樹の青にほのさす日の光り土(つち)ほかほ
かとぬくもりにけり

溫室のくもり硝子に護謨の葉の青くうつり
て外面(そのも)雪ふる

護謨樹(ひ)の鉢を日向に、いだせわが心もまた日
光のなかにいづべく

わがこころのふるさとの色青の色南あめり
かに生ふる護謨の樹

樹に風鳴り樹に日は近くかがやけりわれ青
き樹にならばやとおもふ

空のもと樹は大搖れに搖れゐたり風さらに
吹け樹よ渦をまけ

第五卷

大正三年の作

一月、南上總に遊ぶ。海の歌其他五十九首。

黝(くろ)みたる海はうづまき大空は風燒(かぜや)けすなり
われは旅人

砂に埋(うも)れて黑き屋根(やね)のみ見する家砂山の家
鷗群れ啼く

誰が家ぞ砂に埋れて雜草の枯れたる屋根を
黑くみするは

＊

卓上の銀の時計に打ちひびく暴風する夜の
海の底鳴

隣室のましろきべつとわれひとりさめて暗
夜の暴風をきけり

黑々と垂れし帆かけのうつりくる古き旅館
の夜の硝子窓

大魚數多渚のうへにうちあぐる如き音して
海くれにけり

硝子戸のそとは海なり黑々と生きて動けり
日の暮れ行けば

夷隅川青き彼方に斷崖のしろくひかれる岬
がみゆる

砂山にのぼれば黑き海うごくその外濱の干
鰯干しども

砂山によろめき立てる旅館あり人棲まずして冬の日低し

雲雀に似て風に追はるる名無鳥ちちと砂丘の枯草に入る

砂山の砂を吹く風生けるごと砂を吹く風、日はかげりゆく

日に白き断層面をさらしたる岬をみむと砂山のぼる

砂山の埋れし家の屋根瓦黒きをかへしのぞきみしかも

＊

腹白き巨口の魚を脊に負ひて汐川口をいゆくわかもの

濃青なる汐川口に沈みたるボイラアのありて赤錆びにけり

川口の半ば沈みしボイラアに外海の日の赤濁りたる

小石投ぐれば水を彈きてボイラアの前にお
ちけり、青き川口

川口に立てば西風砂を吹き砂を強吹く、日の
色かなし

外濱の風燒空の下にしてほしかほしする無
口の男よ

ほしかほしの黑きかげのみそこここに動き
て西日、風砂を吹く

太東岬に行きてうたへる

岬へと河をわたれば渚邊は砂鐵に黑み日に
光りけり

潮疾く青浪さわぐ河口をわが船横切るその
河ぐちを

太陽を友達のやうに話したる老船頭のかほ
のおほきさ

對岸の崖はひあがる船頭のふりむきし顔の
赤かりしかな

日に黑く砂鐵の光る外海の三角洲をばわれ
等行きにけり

岬の麓立枯れ林しらじらと海にむかへり砂
原くろし

蜑少女くろぐろよりて立枯れの林のなかに
火を赤く焚く

船骨の赤錆びたるが鋭くもわが眼に入りぬ
みさきの林

廢船の碎片が砂に埋れたり錨は赤く日に錆
びにけり

斷面はしろく鋭く外海のあをきにむかひみ
さきぞ尖る

鎌の如く白く鋭く尖りたる斷崖をわれら這
ひのぼりけり

青浪に眩暈おぼえて尖りたるみさき斷崖わ
れらぞつたふ

唯われらわかぬ力に牽かれつつ斷崖をよぢ
斷崖をよづ

岬はも小さなりける人間を數人のせたりそ
の斷崖に

岬頭の巖は尖りてまはだかに空にそそれり
青海、青海

斷崖の上にはらばひわが生命かけて摘みけ
る濱防風ぞ

生きもののなかの小ひさき人間の生命いと
ほし斷崖のうへ

わが妻を物めづらかに岬頭の枯草のなかに
見出でけるかな

海の力きたりてとどろおびやかす岬は生き
て動きいづるや

勝浦より御宿まで

青海はややくろみたり山々はまろく岡めく
總の國行く

冬銀杏灰白色に日に燃ゆる海そひまちのあ
をき病院

日のあたる岬の山を青海の彼方にみつつ總
の國行くも

岩山の青樹を風があふるなりその下をわれ
海みつつ行く

陰影おほき小さき港のそこここに海をいだ
ける總の國はも

ほたほたと赤花を散らす一老樹風のなかな
る一樹の椿

青海は青し椿はあかかりきその海くろみ日
はかげりけり

風波の騒ぐ海邊を赤椿たわわに手折りわが
行きにけり

海岸の一坪程の青菜畑日がいつぱいにあた
りてゐたり

赤き帆の房州船が泡立てる海にかたむきか
たむき走る

大鰯網からだに卷きて漁夫等の一列が行く
日の外濱を

白痴でんざうの歌

でんざうは頸くくりける頭取のねまき着古
しふところでせり

でんざうは默々としてうす青き菜畑の隅に
物を喰めりき

黄なる蘆刈れる女の赤き帶でんざうぞみる
彼も生きもの

冬青の實の赤きがもとにうしろむき歌へる
彼のふところでかな

でんざうは鴉の如し外濱に于鰯を喰めりく
ろきほしかを

砂濱の于鰯を喰みしでんざうの口ばたにつ
きし黑き荒砂

砂山のうもれし家の屋根上に日なたぼこす
る彼も生きもの

二月はじめ、安房の外濱をめぐる。歌
すべて五十一首。

わが眠らざる旅館の窓べ苦しき苦しき鋭き
冬の曉きたる

苦しき苦しき一夜はあけぬ底深き冬の朝空
の青の冷たさ

停車場の時計の音のかくばかり鋭きひびき
をきかざりしかな

白塗の朝の停車場に鈴が鳴るわが痛む胃の
この鋭さよ

一枚の赤き地圖をば停車場の賣店に買ふ冬
の朝あはれ

停車場の待合室の大きなる素木の卓にわが
手紙かく

朝の停車場待合室の硝子窓青きに搖るる常
盤木の群れ

房總の國境、おせんころがしの崖上
の一茶店に宿りて

崖下の夜の深海のふかぶかと呼吸してあり
し底ひ暗きに

部屋の隅にたてかけありし大きなる黑き洋
傘の闇にみゆるも

さかしまに吹きおろし來し風の音夜の深海
の底にいりしか

はたはたと帆が風になるごとき音この崖上の家のうしろに

深海の崖上の家、うすあかき灯ふき消しわが眠りけり

地の底にとどろと鳴れる反響を海と知りけり夜は暗し暗し

＊

日蓮の生れし國の外濱に入日のひかりあかあかとさす

岬また岬まはれば荒海に入日するなり日蓮をおもふ

日蓮の強きこころにひびきけむ外海の波、風にとも鳴る

日蓮の生れし國の海岸に大魚かなしや血にまみれたり

けだものの肌なす岩にくろき腹みせて日向に海鮫死せり

大男二人してになひきたりける大魚の長尾
砂をすれるも

日のあたる小湊村をゆきすぎてわが日蓮を
思ふなりけり

おほきなる黒き洋傘さし海岸を行く蜑少女、
鴉むれ啼く

わが前の砂山の草に雨こぼれ彼方の岬日が
あたるなり

黒き洋傘彼方砂山のぼり行く黄の枯草に雨
あたたかし

からからと帆をまく音し冬の海黒き縞なし
夜となりにけり

岬のいけす

日の入りし海岸を行き底暗く深きいけすを
わがのぞきけり

暗き水とろりとろりと底ひより動くなりけり岬のいけす

海はくらくいけすはさらに暗かりきけけろと啼きて空わたる鳥

いけすは暗し、のぞきてあれば生きものの魚のにほひの漂ひにけり

岬はづれの黑き岩をば堀りさげしいけすの底に棲める魚はも

野島岬にてうたへる

夕日岬に赤く濁りてかぢめ燒くのろくく烟地を這ひにけり

人數人ありて岬にかぢめ燒く夕日のなかにその影くろし

我がまへに黑き帆船が大波に搖られゐるなり岬の夕日

黒き岩はみな觸覺をもてるごとし夕日あか
あか岬にしたる

尖りたる岬の黒き岩の上茶色帽子をわがお
きにけり

巖かげに焚火のあとの黒かりきたんぽぽが
咲く夕日うすらに

黒き帆が我が顔の直ぐ前を行くに呼吸つま
るごと我れはみつめぬ

廢船の赤き巖かげに傾きて夕日いつぱいに
うけてゐしかな

白き魚手にさげひとり言しつつ來にし漁夫
と顏みあはせつ

ひとり言しつつ平たきあから顏我が前を行
くにわれも悲しく

岩の上よりつととびしかば吾の足冷たき砂
のなかに埋れぬ

岬に白き牛ゐて啼けり

吾と牛としばし眼と眼をみかはしぬ淋しき
ときに人のする眼を

牛の前にわれうづくまりのぞきけり深海に
似たるその黒き瞳を

夕日のなかに牛の狂ふをみつつわれ遠のき
て強く石投げにけり

牛の額めがけて投げしそげ石の火の如くと
ぶ夕日のなかを

ひじきとり海苔とる少女われの眼に黒くう
つりて岩尖りたり

夕日のなかに着物ぬぎゐる蜑少女海にむか
ひてまはだかとなる

この他國の旅の男にあかゝと焚火をすな
る蜑少女ども

蜜少女焚火をすれば夕闇の空をけけろと鴨
啼きすぐる

＊

船室の大かけ鏡ときをりに白くひらめく汽
船傾けば

船客の黄いろき顔の二つ三つ鏡のなかに眼
をとぢゐたり

のびあがり窓よりみたる砂山の警報標の赤
かりしかな

＊＊
＊

向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し
日のちひささよ

おもひおこすわがふるさとの古家の裏にか
がやく向日葵畠

夏の日の向日葵畠しんとして物おそろしき
向日葵畠

向日葵畠むかふの小舍のうしろには隣の婿
の壁ぬるがみゆ

壁をぬる隣の婿のくろぐろと壁をぬるみゆ
向日葵畠

淋しさうにうしろ姿を吾にみせ壁塗をせる
彼の破れしやつ

ぐぐと白き豚が一疋鼻さきを地に押しあて
て啼いてゐたりけり

向日葵畠の隅の豚小舍十あまり無智のうか
らの尊かりけり

日の赤きゆふべなりけり白牡豚壁板破りお
どりいでたり

いかにこのましろき豚の肉太(ししむさ)の豚の逃げい
る向日葵畠

わがもてる細き青竹ひしと鳴り豚の背をう
つそのこころよさ

赤ぎらふ夕日の前の道化者うたれてにぐる
豚のよろしも

向日葵畠ひた啼きめぐり啼きめぐる我が白
豚の尾が日に光る

畑土のなかに鼻さき突きいれて彼れは金茶
の眼を光らせつ

富藏の歌

大藪が渦をまきゐるあらしの日わが富藏の
氣が狂れにけり

ひるもなほ暗きくどべにうづくまりわが富
藏の物思ふ顏

わが家のくらき納戸の長持に腰かけてゐし
富藏の顏

冬の夜の暗きくどよりのつそりといで來し
彼の眼の光りたる

富藏が手の大鎌のひかりけりその大鎌のく
さかり鎌は

油部屋の暗き隅なる壁の上かかりし鎌のそ
の大鎌ぞ

氣狂ひが鎌をもつたる眼の光り冬のゆふべ
のくらがりの土間

とろとろと音たてて古き水甕に泉水おつる
なり冬のかはたれ

富藏はわがかくれ穴掘るといひて冬空寒く
大鍬をふる

竹藪の崖にむかひて鍬をふる富藏の心かな
しかりけり

竹藪のなかのほそみち一すぢに駈けあがり
たる狂者の心

護謨の若木と梛子の實

梛子の實の青く芽ぶくときくさへにそのなつかしさかかへてかへりし

銀座なる五番館の店の硝子戸のなかにさ青に芽ぶきし梛子の實

我が部屋の椅子の上にて梛子の實が青く芽をふく夜のたのしさよ

一鉢の護謨の若木の前にしてわが心いましづかなりけり

一樹の護謨その青き葉のはばひろく厚きに強き日の匂ひする

顏近く護謨の若木によせにつつ七月の日の光りを感ず

大正四年四月二十日印刷
大正四年四月廿三日發行
黑曜集
定價六十錢

不許複製

著者　前田夕暮
發行者　東京市神田區佐久間町四ノ二三　植竹喜四郎
印刷者　東京市本所區番場町四番地　朝岡平藏
發行所　東京市神田區佐久間町四丁目　植竹書院
振替東京一二九五三・電話下谷三四一九
—印刷所　凸版印刷株式會社本所分工場—
（製本福神）

現代和歌選集叢書

第一篇	第二篇	第三篇	續刊
夕暮名歌選集 **黑曜集**	牧水名歌選集 **行人行歌**	哀果名歌選集 **萬物の世界**	空穗選集 勇選集 白秋選集 信綱選集 柴舟選集
菊半截・繻子製表紙 定價六十錢	繻子と絹の裝幀 定價六十錢	菊半截箱入美本 定價六十錢	以下交渉中

THE SELLING & BUYING
OF BOOKS
武内書店
大阪天下茶屋聖天阪停留所前